

# 原爆文学研究会報

第七四号

原爆文学研究会 二〇二五年六月

田中熙巳さんのノーベル賞受賞演説から

長野 秀樹

今年の三月末で、定年退職から二年が過ぎました。二九歳で働き始めて、三六年しか働いていませんが一区切り。手話関係の団体の長崎支部長は昨年退任し、研究会の世話人にも手を上げませんでした。

『東京かわら版』という雑誌のコラムで、私より五歳年長の寺脇研さんが高校（男子校）の同級生の三割が既に亡くなっていると書いています。実際にお会いした時にその話をする「実際には三割近くですけどね。」ということではありましたが。

とまれ、あと五年で三割近くの同級生が死ぬのなら、もう死は偶然でしかありません。いやいや死は必然ではないのか、という声もしますが、いつ、どのように死を迎えるかはたまたまに過ぎないということです。

昨年は日本原水爆被爆者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受賞しました。代表委員の田中熙巳さんの受賞演説全文（西日本新聞）（二月一日）では、昭和二〇年末までの広島、長崎での死者をそれぞれ一四万人、七万人前後と推定し、被爆し傷つきながら、生存した人たちを四〇万人余りと推定しています。田中さんは「もう一度繰り返し返します。原爆で亡くなった死者に対する償いは日本政府は全くしていないという事実をお知りいただきたい」。それまでの被爆者に対する法律を統合する形で、平成六年

に「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律（被爆者援護法）」は制定されたが、それには死者に対する「償い」は含まれていないということを田中さんは繰り返し返しているのです。「その時目にした人々の死にざまは、人間の死とはとても思えないありさまでした。誰からの手当ても受けることなく苦しんでいる人々が何十人何百人といました。たとえ戦争といえどもこんな殺し方、傷つけかたをしてはいけないうと、強く感じました。」生き残った田中さんと、このようにして死なねばならなかった人々との間にあったのは、爆心地からの距離であったり、遮蔽物の有無であったり、偶然でしかなかったと思われる。

青来有一さんは「考えてみたらあの日、あの時、そこにいなかったという一点において、わたしもまた多くの原子爆弾などには無縁の人々となんらかわりはないのではないか」（「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」）と自問自答しています。

偶然が分けた生と死をどう乗り越えるのか。被爆者「である」ことと死者「である」こと。死者の名誉を回復「する」こと。最近考えているのは丸山真男のいう「「である」ことと「する」こと」についてです。高校教科書の定番教材でもあるこの文章では、「する」ことの意義が強調されていますが、「偶然と必然」ということも踏まえながら、「である」ことの意味を考えたいと思っています。

## 第七四回 原爆文学研究会報告

二〇二五年三月一五・一六日に、第七四回原爆文学研究会を、福岡大学での対面と、オンライン会議システムを用いたハイブリッド形式で行いました（共催：JSPS 科研費 24K22467）。

一日目は、牧野格子さんによる研究発表①「研究発表「原爆文学」とロマン・キム著『広島からきた少女』」と、加島正浩さんの新著『終わっていない、逃れられない 〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む』（文学通信、二〇二四）の合評会を行いました。合評会のパネリストには会員から四條知恵さん、高橋由貴さんを、ゲストとして俳人の外山一機さんをお招きしました。

二日目は、和田崇さんによる研究発表②「東ドイツにおける日本の原爆文学の翻訳——一九五〇～一九六〇年代を中心に——」、朴恩斌さんによる研究発表③「研究発表 小林エリカ『彼女は鏡の中を覗きこむ』論——記憶の継承と感覚の交差——」が行われました。

両日、日本国内にとどまらない原爆文学に関する発表があり、院生の発表に対しても盛んな質疑があったうえ、応答も大変盛り上がりしました。加島さんの新著の合評会も充実しており、実りの多い会となりました。

### ◇研究発表①

#### 「原爆文学」と『広島からきた少女』

牧野 格子

本発表は二部構成とした。第一部では、ソ連の作家ロマン・キムによる小説『広島からきた少女』（一九五四年）の内容を紹介するとともに、この作品が中国および日本においてどのように受容

されたかについて、翻訳、演劇上演、文化的反応など多角的な視点から考察を行った。第二部では、本作品がいわゆる「原爆文学」に該当するかを問い、その文学的な位置づけとジャンルの特性について検討を試みた。

ロマン・キム（一八九九～一九六七）は朝鮮系ソ連人で、幼少期を日本で過ごし、その後ソ連でスパイ活動にも従事したという特異な経歴をもつ作家である。彼の小説『広島からきた少女』は、一九五四年に雑誌『Октябрь』第八・九号に掲載され、一九五六年にはМолодая Гвардия社より単行本として出版された。物語は、広島で原爆を生き延びた少女スミコが、生存の苦悩を経て、一九五〇年代の内灘闘争（米軍基地反対運動）に身を投じる姿を描いている。原爆被害の描写にとどまらず、日本社会の現実、米軍の駐留、日本人の抵抗の意志などが緻密に描かれており、作者の日本滞在経験や情報収集活動が反映されていることがうかがえる。

一九五五年には王民泉訳の中国語版『広島姑娘』が刊行され、著名な女性作家・謝冰心が書評を寄せた。一九五七年には禾金による別訳『広島女兒』も出版された。さらに一九六〇年には、上海滬劇団によって本作が舞台化され、同年に訪中した日本の新劇関係者がこの上演を鑑賞している。政治的メッセージの強さや視覚的表現の違和感が指摘された。本作はソ連・中国において「米帝国主義批判」として強く受容されたが、主人公スミコの肉体的な変化や成長にも注目すべき点が多く、単なるプロパガンダ作品には収まらない多層的な読みを可能にしている。

第二部では、長岡弘芳『原爆文学論』や川西政明『昭和文学史』の議論を参照しながら、作品前半における被爆体験の描写と、後

半の政治運動への展開との接続に注目した。スミコの個人的記憶がやがて集団の歴史意識へと昇華されていく過程は、従来の日本の原爆文学とは異なる特徴をもち、むしろプロレタリア文学や社会主義リアリズムの系譜に位置づけられると考えられる。

質疑応答の場では、多くの有益なご意見をいただき、今後の研究の深化に向けた大きな示唆を得た。ご指導、ご助言に心より感謝申し上げます。

#### ◇合評会

#### （書評Ⅰ）短歌・俳句の余白の可能性

#### 四條 知恵

本報告では、歴史叙述の観点から、短歌・俳句の余白の可能性を考えた。短歌・俳句は、連作になることで記録性も持ちうる、歴史叙述の一つでもある。いかなる歴史叙述にも選択と強調と削除があるが、文字数に制約のある短歌・俳句では、さらにこの傾向が顕著になる。語られない余白が、相対的に多い語り方である。同時に、言葉を絞った短詩ならではのあいまいさが、多面性をもたらす。文脈から切り離された「遺品」にも似て、時に一つの歌は、それぞれの読者に全く異なる景色を思い起こさせる。ただ、短歌・俳句の持つこの「多面性」と「普遍性」は、切り分けて捉える必要があると感じる。

松尾あつゆきの句からは、詠まれた背景を知らずとも、哀しみが立ち上がってくる。「普遍性」があるとは、どういうことなのだろうか。「普遍性」は、読み手の「共感」により生み出される。そこでの「普遍性」は、読み手の理解の外にあるものを、理解可能な範囲に縮小、あるいは別の方向に拡大する装置ともなりう

る。そもそも、俳句の季語は、「日本人」の集合的記憶としての季節のイメージを喚起する言葉である。「普遍性」が、集団が共有するイメージ、すなわち社会的な記憶を拠り所として生まれるものならば、その集団に誰が含まれ、誰が含まれないのかということを考える必要がある。「普遍性」には、権力が付随する。

歌や句は、余白が多い分、何を詠むのかという詠み手の問題と同時に、何を読み取るのか、という読み手の姿勢が問われる様式である。歌集・句集では、歌や句が連なることにより、前後の文脈がある程度補われるが、一つの歌で「起こったこと」の特殊性を語るには、背景を読み解く読者の知識も求められる。出来事に対する知識がなければ、余白に想像を広げようとしても、読み手の経験した理解の範囲にとどまり、「起こったこと」とは、すれ違ってしまふ。

本来、歌や句の読み方は、自由である。ただ、記録性を重視するならば、その「余白」が生み出す共感に甘んじることなく、そこで何が語られず、読み手としての自らの想像力の範囲外に何があるのかを問う必要がある。

今回の合評会は、たった一七あるいは三二文字の短歌・俳句の世界に、言葉をめぐる社会の問題が凝縮されているということ、そして、そのなかで詩を詠み続ける人の心の在りようを知る、得難い機会となった。

#### （書評Ⅱ）詩歌をめぐる柔く曖昧な境界

#### 高橋 由貴

本書は、震災後の文学を紹介する一般書であり、二〇一一年以降の短歌・俳句をめぐる批評書であり、さらに博士論文にも連な

る学術的な書でもある。第一作目の単著でありながら、震災とそれに関わる文学を現在に広く問うという、加島氏しか引き受けられない固有で重要な試みの一冊であることは間違いないだろう。

この一四年の間に世に出された数多くの震災に関わる俳句短歌を紹介する使命を背負い、広くそれを掬い上げるという役割を担いながら、同人（誌）や結社の中で流通する〈公／私〉の曖昧かつ独特な詩歌というジャンルに切り込み、さらにその歌が秀歌・秀句か否かにまで踏み込んで評する。そして、〈東京Ⅱ中央〉から小説を中心として展開されてきた従来の震災後文学論を、批判的かつ学術的に継承する道筋を模索する。このような本書のスタイルは野心的である。しかしだからこそ、合評会では、このような長所が本当にそうであるのかを（再）確認する問いを投げかけたいと考えた。

小説は（あるいは現代詩も）、発表するという作者の意思と、公表されるべきだという他人を介したプロセスとを経た文学ジャンルである。しかしながら短歌・俳句は、有名性を伴わないアマチュア層での広がり、ローカルかつ同人内で流通する文学ジャンルあり、「見られたいけれど開かれたくない」「ここだから歌や句を発表できる」という〈外／内〉の境界が個別に設定される特異な性質を帯びている。にもかかわらず、批評されることを引き受けた小説（家）と同じように、短歌・俳句（および歌人・俳人）を論じることが可能だろうか。今回の報告では、この点について、ジャンルの固有性、また原爆文学における短詩芸術の議論との接続について私見を述べた。さらに、「響く・伝える・引き受ける」と単に共感するのではなく、また文学研究者が秀句かどうかを選別して良し悪しを断じる選者の位置に立つのでもなく、短歌・俳句

を「論じる」という姿勢をどう考えるかという提起とともに、第四章の澤正宏氏の歌集を加島氏とは異なる評価と着眼とで言及してみた。

重ねて強調するが、本書は、歌集や句集の収集と検討という地道で難しい作業を経て、またそこで描かれる過酷さを読むことに耐え続けるという点において、相当な労作であることは間違いない。しかし、だからこそ、「終わっていない、逃げられない」、この「ない」「ない」と二つ重ねる本書の強いタイトルが、メディア寄りの文言のようでいささか戸惑いを覚えてしまう。何かが起きて「終わる」ことはないことはもちろんであるが、こと福島に住んで生活することには、「逃げる・逃げない」という言葉と釣り合わないような気持ち（私は）起こる。こういう微妙で言い表し難いこと、強くわかりやすい言語化を拒んで迂回するのが詩歌というジャンルであったはず、というところを、加島氏だけでなく、本研究会にて提起したいと試みた今回の報告であった。

（書評Ⅲ）震災俳句の読みがたさ

外山 一機

加島正浩の『終わっていない、逃れられない 〈当事者たち〉の震災俳句と短歌を読む』で扱われている作品の一つに、小野智美編『女川一中生の句 あの日から』がある。これは女川第一中学校の生徒が作った俳句をまとめたものだ。小野はここで生徒たちと対話を重ね、作品を紹介している。

加島はその紹介文に着目し、小野が句の解釈をある一つの方向へ誘導するかのような書きかたをしていることの持つ暴力性を指摘する。たしかに、小野のふるまいには危ういものがある。それ

は、他者の言葉を篡奪し、のみならず、その他者を、傷に打ち勝つ能動的な存在であるかのように書き換えているからである。

しかしその一方で、読み手による言葉の篡奪の問題については、俳句形式の特性に落とし込んだうえでより多様に検討されるべきものでもある。俳句は他の文芸形式に比べると余白が大きい。その余白をどう埋めていくかという点に読み手の力量が試される。するが、たとえば高野ムツオが句をしばしば震災に引き付けて読んでいくとき、そのふるまいは、解釈の誘導、言葉の篡奪ではないのか。しかしここで考えるべきは、高野においては読みが詠みへと環流し、あるいは詠みが読みへと環流しているということだ。言葉の篡奪にも見える行為も、ときに自らの作家的実存を賭した切実さを帯びることがあるのである。

ところで、加島はまた、本書において「被災時の歌の詠み方」があり、それは「平時に研鑽されてきた〈表現の技法〉からみれば、そこからはずれるへなにか」であるとも述べる。しかしそれは本当だろうか。むしろ被災時においてこそ「平時に研鑽されてきた〈表現の技法〉」が強化されるのではないか。なぜなら、そもそも俳句とは、それにかかわる者たちに「中央」の価値観への加担と「特殊」性の捨象とを求めるものであるからだ。

たとえば、釜石で被災した照井翠は「ここ被災地では、私達は三月を愛さない」と記す（『釜石の風』コールサック社、二〇一九）。しかし照井はその一方で俳句形式を選択し続け、有季での表現さえ選んでいる。これはむしろ「平時に研鑽されてきた〈表現の技法〉」への依存である。俳句は、人が「特殊」性を否応なしに背負い込んでしまったとき、それを手放す手段として機能しうる。それは俳句のもたらす救いでもある。この意味において、被災時

においてこそ「平時に研鑽されてきた〈表現の技法〉」は求められ、強化されうる。

#### ◇研究発表②

#### 東ドイツにおける日本の原爆文学の翻訳

——一九五〇～一九六〇年代を中心に——

和田 崇

東ドイツ（ドイツ民主共和国：一九四九～一九九〇年）は、東西冷戦下で東側ブロックに属した国家であり、西ドイツの外交政策ハルシュタイン・ドクトリンの影響により、日本との国交は一九七三年まで樹立されなかった。たとえば、旧共産圏における日本イメージの典型である *Heute in Japan*（一九五九）「今日の日本」を著したウルリッヒ・マコーシュは、渡日に際してチェコスロヴァキアの日本大使館で渡航証明を交付されている。このように、日本との国交がなく、情報を得る手段も著しく限られた中で、それでも日本に関心を持ち、翻訳を通じて日本の現状や文化を東ドイツに伝えた人々がいた。本研究は、そうした日本と東ドイツの限られた文化交流の実態を、〈原爆〉の観点から探る試みである。

本報告では、一九五〇～一九六〇年代に焦点を当て、以下の四つの観点から調査結果を発表した。まず、一九五一年に東ベルリンで開催された第三回世界青年学生祭典の国際文化コンクールに、峠三吉『原爆詩集』が送られており、これが東ドイツと原爆文学の最初の接触のようにも思えるが、記録映画やコンクールのプログラムを確認すると、ただ「送られた」だけであった可能性が高い。次に、一九五四年に映画版『原爆の子』が東ドイツで上映され、一九五八年には丸木夫妻『原爆の図』の複製展示と阿川

弘之「魔の遺産」の雑誌 Aufbau への翻訳掲載が確認され、いずれもアメリカや西ドイツの核武装を批判する文脈で紹介されていた。さらに、一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけては、厚木たかや浜田知章、中野重治や堀田善衛などの文学者が東ドイツへ渡航し、日本の被爆について語る役割を担っていた。最後に、一九六〇年代になると、フンボルト大学の日本近代文学研究者が頭角を現し、ユルゲン・ベルントが宮本研「ザ・パイロット」を、エディト・ラウが長田新編『原爆の子』を翻訳し、それと平行するように東ドイツの文学者による原爆文学も生まれた。

質疑応答では、一九五〇年代のストックホルム・アピールや世界平和評議会、一九六四年に被爆者団体が欧米各国を歴訪した世界平和巡礼との関わりについて、ドイツにおける原爆に関する科学言説の受容についてなど、総じて同時代の文学以外の言説や平和団体についても目配りをすべきであるとの指摘を多くいただいた。こうした原爆文学受容をめぐる当時の科学言説や平和団体との関連性や差異については、今後の課題としたい。

#### ◇研究発表③

##### 小林エリカ『彼女は鏡の中を覗きこむ』論

##### ——記憶の継承と感覚の交差

朴恩斌

小林エリカ（一九七八～）による作品集『彼女は鏡の中を覗きこむ』（集英社、二〇一七）を「記憶の継承」と「感覚の交差」という二つの要素を視座に分析した。小林は放射能や幽霊など知覚能力的に認識しがたいものを見えるようにすることで、個人史や女性など概念的に不可視化されているものを可視化するという

作業を行ってきた。このように、小林の作業において視覚という感覚は歴史叙述のメインストリームから外されてきたものの存在を掘り起こす試みと連動している点でとても重要である。

しかしながら、彼女は対象を見えるという行為に潜んでいる暴力性にかなり自覚的であると思われる。本作品集に収録されている短編小説「シー」では相手に何らかのフレームを付与し、その存在を規定する力を持つ「見る」行為に対して反省的な態度が表れており、それに代わる感覚として触覚が提示される。このような問題意識によって、誰かを見ることは中編小説「宝石」では一種の禁忌に描かれる。しかし、語り手はその禁忌を積極的に破り、その代償として石になることを望む。本作で石になることは自らの存在が死者の記憶を生者に伝える導体になることを意味する。生きているものが死んだものの記憶を継承し、死者は彼らの記憶の中で永遠に生きるようになるのだ。この記憶の継承のプロセスは主に母系内の世代を渡って行われるが、後世代の意識に流れ込む記憶はどうとう彼女らの身体的な境界をばかし、精神錯乱を起こす。しかし、こういった記憶の継承から生物学的男性は徹底的に排除されており、これは作品集を通して提示される異性間で行われるタッチング、すなわち身体の境界を確かめるような行為の描写を通じて示されている。

報告後の質疑応答でも話題になったが、このような小林エリカの「男性排除的な」書き方をどう評価すべきかに関してはかなり迷わされる。男性中心的な今までの歴史叙述を鏡写しのように反転させ、男性は周辺へ、女性を中心へという形で作品を書くこと自体の持つ意義は否めない。しかし、こういった二分的な捉え方によって排除されるクイアな存在や、物事の単純化の問題に関し

てはより意識的になる必要があると考えられる。このことについては、小林の最近の活動も踏まえつつ考察を深めていきたいと思う。

## 彙報

### 第七四回 原爆文学研究会

○日時 二〇二五年三月一五(土) 日・一六日(日)

※対面とオンライン (Zoom) のハイブリッド形式で開催

○会場 於・福岡大学 文系センター棟一五階第六会議室

#### ○研究発表①

「原爆文学」と『広島からきた少女』

牧野 格子

○合評会…加島正浩著『終わっていない、逃れられない 者たち』の震災俳句と短歌を読む

〈当事

パネリスト…四条知恵、高橋由貴、外山一機

応答…加島正浩 司会…樫本由貴

#### ○原爆文学研究会総会

#### ○研究発表②

東ドイツにおける日本の原爆文学の翻訳

——一九五〇～一九六〇年代を中心に——

和田 崇

#### ○研究発表③

小林エリカ『彼女は鏡の中を覗きこむ』論

——記憶の継承と感覚の交差

朴 恩斌

## 編集後記

第七四回研究会の会報をお届けします。

巻頭エッセイは長野秀樹さんにお願いました。エッセイを拝読しながら、では、私たちはいま起きている虐殺に対して、何をすることができるのか、死を偶然にも必然にもさせないために、何ができるのだろうかと思ひも致しました。

長野さんはなごらく世話人を務めてくださいました。ありがとうございます。ありがとうございました。すでにホームページには告知してありますが、代表世話人が松永京子さんとなり、次回・八月九日の研究会から、世話人会は新体制となっています。どうぞよろしくお願い致します。

次回の研究会はエコクリティシズム研究会との共催となります。ぜひご参加ください。

最後になりましたが、会報発行が遅くなりまして誠に申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。そして、研究会にご参加いただいた皆様、会報への執筆をご快諾いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(樫本 由貴)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四-〇一八〇 福岡市城南区七隈八一九-一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 URL <http://www.genbunken.net>